

※実務経験のある教員による授業科目

授業概要

日本はジェンダーギャップ指数が149か国中110位であり、ジェンダーギャップが大きい国（男女平等が進んでいない国）として知られている。特に経済と政治の分野で男女のギャップが大きく、その差を埋めることは政策的な課題ともなっている。なぜ女性が経済や政治の場で活躍できないのか。男性も女性もセクシュアル・マイノリティも、平等にのびやかに活躍できる社会とはどのような社会なのか、さまざまな視点から考えていきたい。なお担当教員は出版社に編集者として長年勤務した経験を持ち、ジェンダー視点からの出版物も多く手がけてきた。その経験を起点として、ジェンダー研究、女性労働問題研究に従事している。本講義においても、企業社会とジェンダー、マスメディアとジェンダー、出版文化とジェンダーといったテーマについて自らの実務経験と社会経験を生かした形で講じていく。また社会的な活動をしているゲスト・スピーカーを招いての講義も予定している。

授業計画

第1回	「ジェンダー」って何？～ジェンダー概念について学ぶ
第2回	「女性学」と「男性学」の観点から
第3回	「性と性差の多様性」①
第4回	「性と性差の多様性」②
第5回	教育とジェンダー①
第6回	教育とジェンダー②
第7回	マスメディアとジェンダー
第8回	出版文化とジェンダー
第9回	中間のまとめと課題
第10回	企業社会とジェンダー①
第11回	企業社会とジェンダー②
第12回	労働とケア役割①
第13回	労働とケア役割②
第14回	キャリアコースとライフコース
第15回	ライフワークバランスという考え方
第16回	定期試験

到達目標

目には見えにくい「性差の枠組み」を見抜く力（＝ジェンダーの視点）を獲得することが、まずは目標となる。そのうえで、なぜ、そのような「枠組み」が社会に存在しているのか、それが、人々の生き方にどのような影響を与えているのか、自分で考察できるような力を養うことが到達目標である。

履修上の注意

ノートは積極的にとることを求める。また授業時に課題を与え、それにこたえてもらう、ミニ・レポートの提出を求めることがある。

遅刻は交通機関等、特別な事情がない限り認めない。

予習復習

「ジェンダー学」は単に知識として学ぶものではなく、つねに、現実の社会事象と関連づけながら、自らが「問い」を発し、それについて考えていく態度が必要となる。よって、常日頃から、新聞を読む、報道番組を見る、などの態度が求められる。それ自体が、予習・復習となることを理解して授業に参加してもらいたい。

評価方法

定期試験試験（80%）と、授業時に提出を求めるミニ・レポート（20%）で判断する。

テキスト

- ・教科書名：『はじめてのジェンダー論』
- ・著者名：加藤 秀一
- ・出版社名：有斐閣
- ・出版年：2017年